

平成30年6月19日

独立行政法人 大学入試センター

理事長 山本廣基 様

東京大学高大接続研究開発センター長

元・高大接続システム改革会議委員

南風原朝和

平成30年6月18日発表「大学入学共通テスト」における問題作成の
方向性等と本年11月に実施する試行調査（プレテスト）の趣旨について」
についての公開質問

お世話になっております。私は、テスト理論等を専攻する者として、また山本理事長とも一緒に文部科学省の高大接続システム改革会議の委員を務めた関係からも、新たに実施される予定の大学入学共通テストの動向に注目しております。昨日（6月18日）、貴センターから発表された標記の文書について、以下、3点に絞って質問させていただきたいと存じます。ご多忙のところ誠に恐縮ですが、いずれも回答に時間がかかる内容ではございませんので、できるだけ早くご回答いただけますよう、よろしく申し上げます。なお、問題点とその解決を広く共有していただくため、報道関係者等にもこの質問内容およびご回答を公開する予定ですので、ご了承のほど、よろしく申し上げます。

【1】国語の記述式問題の採点について

別添8には、「国語の記述式問題の小問ごとの段階別表示はa～dの4段階表示とする」とあります。小問の内容が決まらない時点で、どの問題も等しく4段階で評価することと決めることができるのでしょうか。また、a～dの4段階は、それぞれどのような意味をもつ段階なのでしょうか（以上、質問1-1）。

さらに6頁には、「総合評価については80～120字程度を記述する小問についてのみ1.5倍の重み付けを行った上で5段階表示とすることが検討されています」とあります。a～dの記号で表された4段階（数値でないもの）に1.5倍の重み付けを行うことができるのでしょうか（質問1-2）。

関連して、別添8の総合評価における5段階表示（A～E）のイメージ図はどのようにして作成したのでしょうか（質問1-3）。もしも、小問ごとにたとえば1点～4点と数値化し、80～120字程度を記述する小問についてはその1.5倍の1.5点～6点と数値

化して合計し、その合計点を5つの段階に区切ったものでしたら、段階に区切る前の合計点のほうが個人差を識別するうえでより情報量があつて良いのではないのでしょうか（質問1-4）。

この質問1-4については、貴センター主催の2014年度シンポジウム「大学入試の日本的風土は変えられるか」での私の講演等で、限られた数の段階に得点を恣意的に分けることによってせつかくの個人差情報が失われることの問題点を繰り返し指摘してきたところです。なぜ段階に分ける必要があるのか、明確なお答えをお願いします。

【2】英語の出題内容について

9頁に、英語の筆記（リーディング）の出題内容について、「英語の資格・検定試験の活用を通じて「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の総合的な評価がなされる方針であることを踏まえ、試行調査においては、筆記（リーディング）の問題では「読むこと」の力を把握することを目的とし、発音、アクセント、語句整序などの問題は出題せず実施し検証することとします」とあります。しかし、4頁にもあるように、「各大学は、センターが問題を作成し共通テストとして実施する試験と、民間の試験実施主体が実施する資格・検定試験とのいずれか又は双方を利用できることとされています」。つまり、大学によっては、民間試験の受験を求めず、センターが作成する試験のみを課す可能性があります。その場合、発音、アクセント、語句整序などの問題は出題せず、出題内容を現在のセンター試験よりも狭くすることは、上述の「総合的な評価がなされる方針」と逆行するのではないですか（質問2）。

この点については、拙編『検証 迷走する英語入試』（岩波ブックレット）の25頁でも指摘しました。山本理事長にもお届けしてありますので、ご参照いただければと存じます。

【3】2024年度以降の英語試験について

4頁の脚注8に、「2024年度以降の枠組みについては、資格・検定試験の実施・活用状況等を検証しつつ決定される予定」とあります。確認ですが、2024年度以降も貴センターが問題を作成し共通テストとして実施する英語試験が継続する可能性があるという理解でよろしいのでしょうか（質問3）。

以上、どうぞよろしく申し上げます。

以上